

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 教育学 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	竹下 浩子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 家庭科における概念型カリキュラム開発に関する研究 —家政学の視座から持続可能性の概念を育む授業モデルの提案—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	鈴木 明子
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	村上 かおり
審査委員 (Name of the Committee Member)		准教授	牧 貴愛
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、家庭科における概念型カリキュラムの開発に向けて、教科の背景学問である家政学の視座から、持続可能性の概念の認識を育む家庭科授業モデルを構想し、実践による成果の検証に基づいて、概念型の家庭科授業づくりへの提言を行うことを目的としている。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、家政学の視座における家庭科の持続可能な社会の構築を目指した概念型学習の意義と、家庭科独自のカリキュラム展開の可能性について追究した。家政学においては、エコシステムの最小単位である個人の生活の質の向上は、システム全体の多様な要素との関係性の中で展開されることを強調している。これは、個人が、多様な思考や感情をもちながらウェルビーイングを目指して活動を行っている一方で、社会全体のあり様を一つの生命体として捉え、倫理的に行動する価値基準をもち、再生産と修正をおこなうことによってシステムが保障されることを論拠としている。この家政学的問いの立て方におけるアプローチの仕方や方法は、家庭科の教科観にも関わっており、知識と実践の統合のために、個々の倫理観や価値観をみつめることと生活課題を概念レベルで追究することの必要性に言及した。</p> <p>第2章では、家庭科の概念型カリキュラム構築に向けての理論的探究を行い、概念型カリキュラムの特性と指導の特徴及び課題を整理した上で、先行研究における家庭科の概念型カリキュラム研究の現状と課題を明らかにした。また、家庭科独自の観点から、教師が子供たちにより深い次元で理解させたい本質的な考え方を設計するプロセスについて追究した。さらに、生活に係る知識を習得することとどまらず、生活主体としての行動を意識した概念型カリキュラムの構築と実践の必要性を示唆した。</p> <p>第3章では、「国連・持続可能な開発に関するグローバル・レポート 2019」を参考に、SDGs の構成</p>			

概念を整理し、中学校「技術・家庭」家庭分野における家庭科カリキュラムを提案した。グローバル・レポートが示す達成目標としての6つのエントリーポイントを題材に据え、題材ごとに本質的な問いを立てた後、家庭分野の学習内容と対応させた。家庭科は、持続可能な社会の構築そのものが教科の目指す目標であり、6つのエントリーポイントを学習内容に効果的に対応させる構想が可能であった。

第4章では、概念型学習サイクルモデルを用いて、中学校家庭分野における持続可能な消費システムを構築する衣生活内容の授業を構想、実践し、概念型探究の可能性を検証した。教科等を貫く重要概念を「システム」とし、題材を通しての関連概念を「市場とトレンド」、「持続可能性」とした。その結果、生徒たちにはこれまでの服選びの基準を見直す姿勢が見られ、持続可能な消費システムにつながる具体的な考え方や工夫を示し、自分中心の衣生活から主体的な消費者市民としての意識をもつに至る変容が明らかとなった。

第5章では、家庭科における概念型カリキュラムのさらなる展開の可能性を追究し、より多くの教員が実践できる家庭科の授業づくりの手順と評価の在り方、問いを前提とした学習指導案の作成手順を提案し、家庭科における概念型カリキュラムの展望を述べた。

本論文は、次の3点で評価できる。

1. 家政学の視座における家庭科の持続可能な社会の構築を目指した概念型学習の意義と、家庭科独自の展開の可能性について追究したこと。

家政学における生活システムを切り口として、持続可能な社会の構築の概念を取り入れた概念型カリキュラムの構想の可能性に言及したことは、家庭科の背景学問としての家政学のあり様に示唆を与えるとともに、今後の家政学研究の方向性と家庭科教育学研究との関係性の提起につながる。

2. 家庭科の概念型カリキュラム構築に向けての理論的探究を行い、先行研究における家庭科の概念型カリキュラム構築と実践展開の現状と課題を明らかにしたこと。

家庭科独自の観点から、生活主体としての行動を意識した概念型カリキュラムの構築のための理論的基盤を示したことは、今後の家庭科のカリキュラム研究の発展に寄与する。

3. 構想した概念型カリキュラムを実践し、生徒の認識の変容を分析することを通して、学習効果を検証したこと。

生徒が、持続可能性の文脈を、個人、社会、環境の相互作用の視点から理解し、持続可能な社会の構築につながる具体的な認識に至った成果から、家庭科の概念型カリキュラムの実践及びその研究の推進に寄与する。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和6年2月7日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)